

境界から

「銃でなく学ぶ場を」聖書胸に支援 @ イラク・クルド自治区

前日の雨が土漠地帯に潤いを与えていた。秋晴れのイラク北部クルド人自治区アルビル郊外。国内避難民地区にあるプレハブの学校を訪ねたシラン・シエル(49)に子どもたちが駆け寄る。「マルハバ(ようこそ)。きれいな学校をありがとう」
 ここでは小学生から高校生まで550人が2交代で学ぶ。過激派「イスラム国」(IS)の脅威から着の身着のまま逃げてきたイスラム教徒の子どもたちだ。山形市を拠点に国際支援に取り組むNPO「IVY」が施設整備や教員研修を担う。現地職員でキリスト教徒のシランが「ちゃんと勉強している?」と子どもたちに声をかけると、笑顔の輪が広がった。

絶えぬ戦火とどまるる勇氣



①日本のNPO「IVY」が建設した学校を訪れた現地スタッフのシラン・シエル(中央)。イスラム教徒の子どもたちに囲まれ、笑顔を見せる＝イラク北部クルド人自治区アルビル郊外
 ②「イスラム国」(IS)に一時占拠され、破壊の爪痕が残るキリスト教会。シランはISの犠牲になった人々を悼む＝イラク・モスル近郊で

難民 IS掃討後も
 ISはイラク軍と米軍などの掃討作戦で敗退した。国内避難民は今も110万人、内戦が続く隣国シリアからも難民がなだれ込む。
 「復興は遅れ、根深い宗派、部族対立が残る。住んでいた場所への帰還が遅れている」とシラン。「貧困にあえぐ家庭が大半で、親族が犠牲になったり、戦争のトラウマに苦しんだりす

る子もいる」と表情を曇らせた。大規模戦闘は沈静化した。武装組織が乱立する「銃社会」だ。「教育に触れる機会がなければ子どもたちは過激思想に染まりやすく、安易に銃を手にする。武器ではなく学ぶ場を手助けするのが私の役割」。シランの危機感と使命感は強い。
 旧約聖書に登場するカルデア人の末裔。中東ではキリスト教徒は少数派だ。イスラム教徒から迫害され、アラブとクルド両民族の争いに翻弄されてきた歴史を背負う民族でもある。
 シランの歩みは、紛争が絶えない地の苦難を影絵のように浮かび上がらせる。政権が、独立を求めるクルド地域への攻撃を始めた1974年、2人の幼子を抱え、身ごもる母ら一家がアルビルを脱出。トルコ、イラン国境付近の山中をさまよひ、食料や水が枯渇する避難生活の中でシランは生まれた。

放置された遺体袋

故郷に戻ると再び戦火に巻き込まれる。79年に政権を掌握し

たフセイン大統領が翌年、イランと戦争を始めた。8年余り空襲警報に悩まされ、シェルターに駆け込む日々だった。
 おぞましい光景が脳裏に焼き付いている。「国旗が添えられ、家の前に放置された遺体袋をたくさん見た」。戦場に駆り出されて命を落とし、家族に告げられず置き去りにされた兵士だった。「幼心に平和の意義をかみしめた」。前線に赴いた親族は行方不明のままだ。
 フセイン政権軍が戦中、クルド地域へ毒ガス攻撃を仕掛けた時もあった。クルド勢力を敵のイランと通じていると疑ったため。密告が奨励され反体制と疑われると、姿を消す人もいた。「皆、恐怖政治におびえていた」
 イランとの戦争が終わった2年後、イラクはクウェートに攻め込み湾岸危機が発生。シランが住むクルド地域を再びフセインが弾圧、クルド側は米英の支援を受け自治への一步を踏み出す。だがクルド人同士の覇権争いが紛争に発展。物理を学ぶために地元大学に入学した年だっ

た。収まると米国主導のイラク戦争が始まり、フセイン政権は2003年に崩壊した。
 独裁者は消えた。「誰もが今度こそ平穏が訪れると信じた。だが期待は裏切られた」。国内は大混乱し国際テロ組織アルカイダなど過激派が大量に流入。キリスト教徒がイスラム教徒から狙われる事件も頻発した。知人の神父は暗殺された。幸い爆発しなかったものの、姉宅前に爆弾が仕掛けられたこともある。政権は統治能力を欠き、宗派对立が激化してISの台頭を許した。

武装勢力に直談判

「多くの知人や親族が安全を求めて国外に逃れた」。故郷が破壊された人は急増した。シランは難民支援の道に入ることを決意、高校教諭を辞めて地元にとどまった。「学校に通える子ではなく、通えない子を支援しなければ国や地域の将来はない」と考えたからだ。
 13年からIVYに。各地を飛び回り、難民キャンプ支援や学

校づくりに励む。だが苦労は絶えない。地元の政治・武装勢力に占有された学校の明け渡しを求め、直談判に臨んだこともある。IVY事務局長の安達三千代(64)は「何事にも動じない勇氣に脱帽する」と舌を巻く。
 アラブもクルドも大半がイスラム教徒で家父長制が色濃く残る。支援相手から言外に「なぜイスラム教に改宗しないのか」という態度を取られたこともある。支えは聖書の一節だ。「愛

は忍耐強い。愛は情け深い。不義を喜ばず、真実を喜ぶ」。暴力と憎しみが消えない社会で夢は捨てない。「対立と分断を乗り越えて、皆がいつか笑顔で手を握り合える日を願っている」
 あるイスラム教徒の教諭から感謝された一言を胸に刻んでいる。「あなたは、私たちを暗闇から光が当たる場所に連れ出した救世主だ」(敬称略、文・三井潔、写真・金子卓渡＝いずれも共同)

取材メモ

イラクでは「イスラム国」(IS)の脅威は消えたが治安は安定しない。親イラン武装勢力が米軍施設を狙い、トルコがクルド系武装組織に向けて攻撃を仕掛ける。
 クルド人自治区からイラク第2の都市モスルに車で向かうと、米軍の無人機攻撃で殺害されたイラン革命防衛隊の司令官の肖像旗が多数はためいていた。米国

の敵は、この地では「英雄」だ。難民キャンプで息を潜める元ISメンバーや協力者も多いと耳にした。帰還が進めば、国内が再混乱しかねない危うい均衡を実感した。

この記事へのご意見やご感想を共同通信編集委員室「境界から」係までお寄せください。ファクスは03(6252)8741、メールはkyokai2024@kyodonews.jpです。

